

『哲学の探求』第39号刊行にあたって

今年も『哲学の探求』を皆様にお届けする次第となった。本号は『哲学の探求』通算第39号であり、2011年度「哲学若手研究者フォーラム(略して「若手フォーラム」、旧名称は全国若手哲学者研究ゼミナール)」の活動記録であると同時に成果報告である。

そもそも「若手フォーラム」とは、大学院生・学部生・オーバードクターらを中心に毎年開催されている哲学研究集会である。宿泊施設付きの会場で一泊二日の日程で開催される本フォーラムには、大学・専門・身分の枠を超えて、毎年、全国各地から哲学に関心のある若者が100人近く参加している。そして、このフォーラムの二本柱を成すのが、大学教員の方を招いてひとつのテーマに沿って行われる「テーマレクチャー」と応募者による「個人研究発表」であり、本号掲載論文もすべて、昨年2011年7月16、17日に開催された同フォーラムにおけるテーマレクチャーおよび個人研究発表を基にしている。特に個人研究発表の論文はフォーラムにおける議論の成果でもある。

本フォーラムの個人研究発表の特徴を述べると、他の学会と比べ質疑応答の時間がとても長いという点があげられるだろう。質疑応答の時間も後半に差しかかると、もはや誰が発表者で誰が質問者であったのかすらわからないほどに参加者たちの「対話」は白熱し、さほど広くはない会場がまさに「フォーラム」「アゴラ」と化す。ともすれば象牙の塔に籠もりがちな哲学研究者たちにとって、このような体験が貴重でないはずがない。さらに発表後も哲学談義は夜が更けるまで、否、夜が明けるまでつづけられることが常である。

次に2011年度若手フォーラムのテーマレクチャーに触れておきたい。昨年のテーマレクチャーでは「論理学の哲学」の題のもと、岡本賢吾(首都大学東京)、金子洋之(専修大学)の各氏に講演をいただいた。19世紀から20世紀初頭にかけて劇的な進化を遂げ、今なお哲学に新たな光明を与えながらも複雑化の一途を辿る論理学に関して、日本を代表する研究者であるお二人によるレクチャーは若手研究者に様々な意味で少なからぬ刺激を与えたのではないかと思っている。本号には、そのレクチャーに基づいた金子先生の論文が掲載されている。岡本先生の論文は次号に掲載する予定である。

さて、私がこの原稿を書いているのは「あの日」から早一年が経とうかとしている 2012 年 2 月半ばである。関東で生まれ育った私にとって昨年の天災及び人災はかつて経験したことのないことであった。そのような状況の中で、前号の『哲学の探求』第 38 号は一時刊行が危ぶまれたが、前世話人たちの迅速な対応のおかげで無事出版された。また、いくつかの学会が開催を見送り、あるいは予定の変更を行う中、前年の若手フォーラムが予告通りに開催されたことは、世話人のみならず、参加者の皆様、レクチャーの先生方の協力によるものだと思っている。前年の世話人を代表してこの場を借りて、今一度感謝の意を伝えておきたい。個人的なことをいえば、あの日私の頭上にはエアコンが降ってきたにも関わらず、私が今でも哲学することができている幸運、ないし悪運に感謝しなければなるまい。

次回 2012 年度のフォーラムは、7 月 21, 22 日(土,日)の二日間で、例年同様国立オリンピック記念青少年総合センター(東京・代々木)にて開催される。テーマレクチャーのタイトルは「メタ倫理」。高橋久一郎(千葉大学)、成田和信(慶應義塾大学)の各氏にご講演をいただく予定となっている(その講演要旨はすでに今号 113 ~ 118 ページおよび、ホームページ <http://www.wakate-forum.org/> に掲載されている)。

個人研究発表枠も例年通り、十分な数を用意している。最新の研究成果をお持ちの方、論文作成前に多くの人から意見をもらいたい方、萌芽的な思考を練り上げたい方、さまざまな方の発表をお待ちしている。共に哲学若手研究者フォーラムを形成してもらいたい(次回フォーラムの詳細は本号 111 ~ 112 ページに掲載)。

若手哲学者たちの今年度フォーラムへの参加の期待とともに、『哲学の探求』第 39 号をお送りする。

2011 年度・世話人総務担当
渋川優太